

一般の部課題 「吾輩は猫である」より抜粋 夏目漱石

渡部 … 吾輩は猫である。名前はまだ無い。

A … じい<sup>じい</sup>で生<sup>な</sup>れたか<sup>か</sup>とんと見<sup>み</sup>当<sup>あ</sup>がつかぬ。

何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というものを見た。

しかもあとで聞くとそれは書生<sup>しよせい</sup>という人間<sup>にんげん</sup>中で一番<sup>いちばん</sup>癡<sup>ち</sup>悪<sup>あく</sup>な種<sup>しゆ</sup>族<sup>ぞく</sup>であったぞうだ。

この書生<sup>しよせい</sup>というのは時々我々<sup>われわれ</sup>を捕<sup>と</sup>えて煮<sup>に</sup>て食<sup>く</sup>つてついで話<sup>わ</sup>である。

しかしその当<sup>あ</sup>時は何<sup>なに</sup>という考<sup>かんが</sup>えもなかつたから別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>恐<sup>おそ</sup>いとも思<sup>おも</sup>わなかつた。

ただ彼の掌<sup>てのひら</sup>に載<sup>の</sup>せられてスーと持ち上げられた時<sup>とき</sup>何<sup>なに</sup>だかフワフワした感じ<sup>かんじ</sup>があつたばかりである。

掌<sup>てのひら</sup>の上<sup>うへ</sup>で少し落<sup>お</sup>ちついて書生<sup>しよせい</sup>の顔<sup>かほ</sup>を見たのがいわゆる人間<sup>にんげん</sup>というもの<sup>もの</sup>の見<sup>み</sup>始<sup>はじめ</sup>である。

この時<sup>とき</sup>妙<sup>たぎ</sup>なものだと思<sup>おも</sup>つた感じ<sup>かんじ</sup>が今<sup>いま</sup>でも残<sup>のこ</sup>っている

B … 吾輩<sup>われわれ</sup>がこの家<sup>いへ</sup>へ住<sup>す</sup>み込んだ当<sup>あ</sup>時は、主人<sup>しゆじん</sup>以外<sup>いげん</sup>のものにははなはだ不<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>望<sup>ぼう</sup>であつた。

どいへ行<sup>い</sup>つても跳<sup>は</sup>ね付<sup>け</sup>けられて植<sup>う</sup>手<sup>て</sup>でこしてへね手<sup>て</sup>がなかつた。

いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。

吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に  
いる事をこつめた。

朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。

彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。

これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかった  
からやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い  
昼は椽側へ寝る事とした。

しかし一番心持の好いのは夜に入ってこのうちの小供の寝床へもべ  
り込んでいっしょに寝る事である。

C

∴いっしょに寝ては猫といえどもやり切れない。

皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ。と英吉利のシニア

ー・スミスとか云う人が苦しがつた。と云う話があるが、たゞ骨だけ  
にならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の毛衣だけはちよ  
っと洗い張りでもするが、もしくは当分の中質にでも入れたいような  
気がする。

人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で  
押し通す、至って単純な無事な銭のかからない生涯を送っている。



| D | C | B | A | 配分 |
|---|---|---|---|----|
| • | • | • | • |    |
| • | • | • | • |    |
| • | • | • | • |    |
| D | C | B | A |    |

れるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽になって、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。もう大丈夫と二杯目は難なくやっつけた。ついでに盆の上にごぼれたのも拭<sup>ぬ</sup>うがごとく腹<sup>はら</sup>内に収めた。それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺<sup>う</sup>つため、じっとおとなでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼつとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭<sup>めいてい</sup>も独仙<sup>どくせん</sup>も羹<sup>かみ</sup>を食<sup>く</sup>えと云<sup>い</sup>う気になる。金田<sup>かねだ</sup>のごつねを引掻<sup>ひっかく</sup>ごつねりたくなる。妻君<sup>さいきみ</sup>の鼻<sup>はな</sup>を食<sup>く</sup>い欠<sup>か</sup>きたくなる。うんうんになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起<sup>た</sup>つたりたまたまめきたくなる。じつじつは面白<sup>おもしろ</sup>いところへ出<sup>で</sup>たくなる。おんおん御月<sup>ごげつ</sup>様<sup>さま</sup>今晚<sup>こんばん</sup>はと挨拶<sup>あいさつ</sup>したくなる。べじも愉快<sup>げきげき</sup>だ。